

女子高校生の親準備性の 検討：乳幼児とのふれあい体験有無別の比較

ヤマダ ハルナ サイトウ エミコ
山田 晴奈*¹ 斉藤 恵美子*²

目的 本研究は、女子高校生の親準備性と過去の乳幼児とのふれあい体験（以下、ふれあい体験）の実態を明らかにし、ふれあい体験の有無別に親準備性等を比較することを目的とした。

方法 都内の一女子高等学校に在籍している高校生1～3年生245人を対象として、無記名自記式質問紙調査を留置法で2016年10月に実施した。親準備性として「子ども・子育てに関する意識」7項目、「対子ども社会的自己効力感」10項目を設定した。また、学童期から現在までのふれあい体験を尋ね、体験の有無別に、親準備性、将来の育児支援についての考え、乳幼児および妊婦とかかわった際の対応等の項目を比較した。

結果 有効回答者234人（95.5%）を分析した結果、ふれあい体験ありは187人（79.9%）であった。時期では、小学生162人（86.6%）、中学生123人（65.8%）、高校生91人（48.7%）の順に多かった。ふれあい体験ありと回答した187名のうち、ふれあった乳幼児の年齢は1～3歳（111人、59.4%）、きっかけは親戚（86人、46.0%）が最も多かった。親準備性の項目では、「子ども・子育てに関する意識」の平均得点は2.4点、「対子ども社会的自己効力感」の平均得点は2.8点であった。また、ふれあい体験あり群と体験なし群の比較として、ふれあい体験あり群は、「弟妹」（ $p=0.036$ ）、「年下の親戚」（ $p<0.001$ ）がいると回答した割合が統計的に有意に高かった。また、ふれあい体験あり群は、「子ども・子育てに関する意識」の平均得点（ $p<0.001$ ）、「対子ども社会的自己効力感」の平均得点（ $p=0.006$ ）が有意に高かった。さらに、ふれあい体験あり群は「赤ちゃんふれあう教室に参加したい」（ $p=0.026$ ）と回答した割合が有意に高かった。

結論 乳幼児とのふれあい体験があった女子高校生は、親準備性が高いことが示唆された。少子化に伴い、学童期から青年期の対象が、乳幼児の弟妹等の世話をする機会が減少傾向にあることから、青少年が乳幼児とふれあう機会を地域や学校で意図的に設定することは、地域で子育てを支える社会環境を醸成するだけでなく、青少年自身のその後の妊娠・出産・育児への支援にもつながると考える。

キーワード 女子高校生、親準備性、乳幼児ふれあい体験、少子化、地域

I 緒 言

日本の合計特殊出生率は1.36（2019年）¹⁾と1970年代後半から低下傾向にあり、2020年に策定された少子化社会対策大綱の基本的な考え方

として、結婚・子育て世代が将来にわたる展望を描ける環境をつくること、地域の実情に応じたきめ細かな取り組みを進めること、結婚、妊娠・出産、子ども・子育てに温かい社会をつくること等が示され、支援がさらに推進されるこ

* 1 鹿嶋市健康福祉部介護長寿課保健師 * 2 東京都立大学大学院人間健康科学研究科教授

ととなった²⁾。少子化対策の背景として、個々の生育過程で家庭や地域で異世代の子どもとふれあう機会が減り、特に乳幼児とふれあう経験がないまま親世代になること³⁾や子どもとのかわりを学習する機会が少ないこと⁴⁾が報告されている。このような状況から、日本では地域少子化対策重点推進事業として、中学生や高校生等が乳幼児とふれあう体験等（以下、ふれあい体験）が推進されている⁵⁾⁶⁾。また、次世代育成教育としても、国内外で中等・高等教育の一環として、学校内で乳幼児と接する機会を設定した体験学習が実施されている³⁾⁷⁾⁻¹⁰⁾。ふれあい体験は、青少年期から子育てに対する理解を深め、自身の将来や家庭等を考える機会となること³⁾⁶⁾⁻⁸⁾や、生育過程での乳幼児との接触体験の量や質が親性を育む重要な機会となること¹¹⁾も報告されている。

青年期の中学生や高校生等の乳幼児ふれあい体験の効果については、乳幼児への接し方や育児への理解¹²⁾、母親・父親像⁹⁾、育児責任のイメージ⁷⁾、親性の発達³⁾⁶⁾等が報告されている。親性とは、母親と父親に共通する親の特性であり、「生物学的性差を認めた上で、両性ともに親となることにより発達する人格的特性。そして、親自身へ方向性のある概念」¹³⁾という定義をはじめ、生物的、心理的、人格等、多面的に定義されている¹⁴⁾⁻¹⁷⁾。また、親になることへの準備の過程については、親性準備性¹⁸⁾¹⁹⁾、親準備性²⁰⁾²¹⁾、親世代になる資質²²⁾等についての研究が報告されている。親性準備性と親準備性は類似した概念として定義¹⁸⁾⁻²¹⁾²³⁾⁻²⁵⁾されているため、本研究では親準備性の用語を用いることとした。親準備性は、「近い将来に親になろうとしている年齢段階、すなわち青年期における心理的「親」の状態」²³⁾「心理的にも行動面・身体的にも育児行動をおこなうために必要な資質が形成された状態」²⁴⁾等と定義されている。親準備性は、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質であり、親準備性の形成には、妊娠以前の段階である乳幼児期から青年期までの経験がかかわっていると報告されている²⁰⁾。また、青年期後期の大学生を対象とした研究は

多く¹⁹⁾⁻²¹⁾²⁵⁾、子育てに参加した体験がある学生の方が、親準備性が高いことが明らかになっている²¹⁾。しかし、青年期前期の中学生と高校生を対象とした研究¹⁸⁾²²⁾は少なく、将来、妊娠・出産の可能性のある女性に焦点を当てた研究は見当たらなかった。加えて、生育過程での乳幼児との接触体験が親性を育むと報告¹¹⁾されているが、高校生までに乳幼児と接した経験の実態や、ふれあい体験の有無別の親準備性の違いについては明らかにされていない。そこで、本研究は、女子高校生の親準備性と過去の乳幼児とのふれあい体験を明らかにし、ふれあい体験の有無別に親準備性等を比較することを目的とした。

Ⅱ 方 法

(1) 研究対象者

都内の一女子高等学校に在籍している高校生1～3年生245人（全生徒）を、研究対象とした。調査方法は、無記名自記式質問紙調査として、授業終了後の時間を活用して留置法で実施した。調査実施時期は2016年10月とした。

(2) 調査項目

本研究での親準備性は、研究対象者を高校生と設定したことから、伊藤¹⁸⁾の生涯発達の視点から「子育てを支援する社会の一員としての役割を果たすための資質」とした定義を参考に、「子ども・子育てに関する意識」7項目¹⁸⁾、「対子ども社会的自己効力感」10項目²⁶⁾の17項目を設定した。「子ども・子育てに関する意識」は、「子どもへの親和」（4項目）と「親になることへの受容性」（3項目）の2因子7項目から構成され、3件法（「はい」「どちらともいえない」「いいえ」：3～1点）で、得点が高いほど肯定的な意識が高いことを示している。「対子ども社会的自己効力感」は、「一人で遊んでいる子どもに話しかける」「泣いている子どもに声をかけたり、だき上げてなぐさめる」等の10項目で構成され、4件法（「難しい」～「易しい」：1～4点）で、得点が高いほど自

己効力感が高いことを示している。

乳幼児とのふれあい体験については、乳幼児を抱いたり、一緒に遊んだりした経験の有無を尋ね、経験ありの場合には、その時期について、小学生、中学生、高校生で3区分で回答を求めた。また、対象となった乳幼児の年齢、乳幼児とふれあった頻度、乳幼児とふれあったきっかけ、具体的な体験内容についても尋ねた。さらに、将来の育児に対する考え、乳幼児および妊婦とかかわった際の対応として、「将来、きょうだいや親戚が育児中だったら、きょうだいや親戚の育児を手伝いたい」「赤ちゃんとふれ合う教室があったら、参加したい」「育児中の方または育児経験者から、育児についての話を聞いてみたい」「電車やバス等の公共交通機関にマタニティマークを付けた人がいたら、席を譲りたい」等の9項目を設定し、4件法（「と

てもそう思う」～「全くそう思わない」）で回答を求めた。その他に、学年、弟妹・年下の親戚の有無について尋ねた。

(3) 分析方法

乳幼児とのふれあい体験があると回答した対象を体験あり群、ないと回答した対象を体験なし群として、2群間で各項目を比較した。親準備性の平均点はMann-Whitney検定、それ以外の項目は χ^2 検定を使用した。有意水準は5%とし、解析では、IBM SPSS Statistics Version 23を使用した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認（2016年10月13日承認、承認番号16046）を得て実施した。研究協力機関である高等学校の学校長と学年担当教員に研究の趣旨を文書と口頭で説明した。研究対象者には、授業等の終了後に、研究の目的、方法、本研究への協力は任意であること等を文書と口頭で説明した。また、質問紙を教室に設置した回収袋へ投函することで研究協力に同意したこととみなした。

表1 対象者の特性 (N=234)

	人数	%
学年：1年	85	36.3
：2年	78	33.3
：3年	71	30.3
弟妹 ^{a)} ：あり	103	44.0
：なし	130	55.6
年下の親戚 ^{b)} ：あり	178	76.1
：なし	53	22.6
これまでの乳幼児とのふれあい体験：あり	187	79.9
：なし	47	20.1
「あり」の場合の時期（複数回答）		
小学生時の乳幼児とのふれあい体験：あり	162	86.6
中学生時の乳幼児とのふれあい体験：あり	123	65.8
高校生時の乳幼児とのふれあい体験 ^{c)} ：あり	91	48.7
親準備性		
子ども・子育てに関する意識 ^{d)} (平均±標準偏差)	2.4±0.4	
対子ども社会的自己効力感 ^{e)} (平均±標準偏差)	2.8±0.8	
将来の育児支援に対する考え		
将来、きょうだいや親戚の育児を手伝いたい：思う	204	87.2
：思わない	30	12.8
将来、友達の育児を手伝いたい：思う	187	79.9
：思わない	47	20.1
将来、近所の人の育児を手伝いたい ^{b)} ：思う	132	56.4
：思わない	99	42.3
将来、育児中の人を支えるボランティアに参加したい：思う	110	47.0
：思わない	124	53.0
赤ちゃんとふれあう教室に参加したい ^{a)} ：思う	103	44.0
：思わない	130	55.6
育児中または育児経験者から育児の話を聞きたい：思う	117	50.0
：思わない	117	50.0
公共交通機関に妊婦さんが乗っていたら席を譲りたい：思う	228	97.4
：思わない	6	2.6
公共交通機関にマタニティマークを付けた人が乗っていたら、席を譲りたい：思う	229	97.9
：思わない	5	2.1
公共交通機関に乳幼児を連れのお母さんが乗っていたら、席を譲りたい：思う	226	96.6
：思わない	8	3.4

注 a) 欠測値1人、b) 欠測値3人、c) 欠測値9人、d) 欠測値2人、e) 欠測値8人

Ⅲ 結 果

対象者数245人中235人から回答が得られ、回収率は95.9%であった。全項目の50%以上無回答であった1人を除き、有効回答者を234人（95.5%）とした。

表1に対象者の特性を示す。乳幼児とのふれあい体験ありと回答した対象は187人（79.9%）であった。時期では、小学生162人（86.6%）、中学生123人（65.8%）、高校生91人（48.7%）の順に多かった。「子ども・子育てに関する意識」7項目の平均得点は2.4点、「対子ども社会的自己効力感」10項目の平均得点は2.8点であった。次に、表2にふれあい体験時期別の体験内容を示す。3つの時期ともに、ふれあった乳幼児は1～3歳が40%前後で最も多く、きっかけは親戚が37～49%と最も多かった。実

数としても、ふれあい体験ありと回答した187人のうち、乳幼児の年齢は1～3歳(111人, 59.4%), きっかけは親戚(86名, 46.0%)が最も多かった。具体的な体験内容では、3つの時期ともに「おもちゃで遊んだ」「手を握った」「抱いた」という項目は60%以上が「ある」と回答していた。

表3にふれあい体験あり群と体験なし群で各項目を比較した結果を示す。ふれあい体験あり群は、「弟妹」あり(p=0.036), 「年下の親戚」あり(p<0.001)と回答した割合が統計的に有意に高かった。また、ふれあい体験あり群は、「子ども・子育てに関する意識」平均得点(p<0.001), 「対子ども社会的自己効力感」平均得点(p=0.006)が有意に高かった。さらに、ふれあい体験あり群は「赤ちゃんとうふれあう教室に参加したい」(p=0.026)と回答した割合が有意に高かった。

表2 ふれあい体験の時期と体験内容(複数回答)

	小学生のとき n = 162	中学生のとき n = 123	高校生のとき n = 91
乳幼児の年齢 ^{a)}			
1歳未満	43(26.5)	22(17.9)	21(23.1)
1～3歳	66(40.7)	51(41.5)	36(39.6)
4歳～小学校入学前	51(31.5)	49(39.8)	34(37.4)
ふれあいの頻度 ^{b)}			
頻回	106(65.4)	62(50.4)	45(49.5)
2～3回	46(28.4)	48(39.0)	29(31.9)
1回のみ	10(6.2)	12(9.8)	17(18.7)
きっかけ			
弟妹	44(27.2)	15(12.2)	8(8.8)
親戚	60(37.0)	60(48.8)	40(44.0)
近所の子ども	10(6.2)	5(4.1)	6(6.6)
知り合いの子ども	24(14.8)	22(17.9)	20(22.0)
公園や電車等	2(1.2)	0(-)	1(1.1)
学校の授業	4(2.5)	12(9.8)	1(1.1)
その他	16(9.9)	7(5.7)	15(16.5)
具体的な体験内容			
おもちゃで遊んだ	142(87.7)	102(82.9)	66(72.5)
手を握った	124(76.5)	83(67.5)	62(68.1)
抱いた	118(72.8)	90(73.2)	56(61.5)
あやした	89(54.9)	51(41.5)	45(49.5)
服を着替えさせた	56(34.6)	45(36.6)	35(38.5)
ミルクを飲ませた	54(33.3)	28(22.8)	21(23.1)
お風呂に入れた	38(23.5)	19(15.4)	14(15.4)
おもちゃを交換した	33(20.4)	17(13.8)	9(9.9)
ほおずりをした	32(19.8)	22(17.9)	15(16.5)
その他	13(8.0)	9(7.3)	17(18.7)

注 a) 欠測値3人, b) 欠測値1人

表3 ふれあい体験あり群と体験なし群の比較(N=234)

	ふれあい体験あり群 (n = 187)		ふれあい体験なし群 (n = 47)		p 値
	人	%	人	%	
学年: 1年	74	39.6	11	23.4	0.090
: 2年	61	32.6	17	36.2	
: 3年	52	27.8	19	40.4	
弟妹 ^{a)} : あり	89	47.6	14	29.8	0.036
: なし	98	52.4	32	68.1	
年下の親戚 ^{b)} : あり	155	82.9	23	48.9	p<0.001
: なし	30	16.0	23	48.9	
親準備性					p<0.001
子ども・子育てに関する意識 ^{c)} (平均±標準偏差)	2.5±0.5		2.2±0.4		
対子ども社会的自己効力感 ^{d)} (平均±標準偏差)	2.9±0.7		2.6±0.8		0.006
将来の育児支援に対する考え					0.990
将来、きょうだいや親戚の育児を手伝いたい: 思う : 思わない	163	87.2	41	87.2	
将来、友達の子育てを手伝いたい: 思う : 思わない	24	12.8	6	12.8	0.297
将来、近所の人の育児を手伝いたい ^{e)} : 思う : 思わない	152	81.3	35	74.5	
将来、育児中の人を支えるボランティアに参加したい: 思う : 思わない	35	18.7	12	25.5	0.777
将来、赤ちゃんとうふれあう教室に参加したい ^{f)} : 思う : 思わない	106	56.7	26	55.3	
赤ちゃんとふれあう教室に参加したい ^{f)} : 思う : 思わない	78	41.7	21	44.7	0.096
育児中または育児経験者から育児の話を知りたい: 思う : 思わない	93	49.7	17	36.2	
公共交通機関に妊婦さんが乗っていたら席を譲りたい: 思う : 思わない	94	50.3	30	63.8	0.653
公共交通機関にマタニティマークを付けた人が乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	89	47.6	14	29.8	
公共交通機関に乳幼児を連れられたお母さんが乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	97	51.9	33	70.2	0.026
公共交通機関にマタニティマークを付けた人が乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	99	52.9	18	38.3	
公共交通機関に乳幼児を連れられたお母さんが乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	88	47.1	29	61.7	0.073
公共交通機関にマタニティマークを付けた人が乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	182	97.3	46	97.9	
公共交通機関に乳幼児を連れられたお母さんが乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	5	2.7	1	2.1	0.736
公共交通機関にマタニティマークを付けた人が乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	183	97.9	46	97.9	
公共交通機関に乳幼児を連れられたお母さんが乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	4	2.1	1	2.1	0.502
公共交通機関にマタニティマークを付けた人が乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	181	96.8	45	95.7	
公共交通機関に乳幼児を連れられたお母さんが乗っていたら、席を譲りたい: 思う : 思わない	6	3.2	2	4.3	

注 1) a) 体験なし群: 欠測値1人, b) 体験あり群: 欠測値2人, 体験なし群: 欠測値1人, c) 体験あり群: 欠測値2人, d) 体験あり群: 欠測値7人, 体験なし群: 欠測値1人, e) 体験あり群: 欠測値3人, f) 体験あり群: 欠測値1人
2) 子ども・子育てに関する意識, 対子ども社会的自己効力感はMann-WhitneyのU検定, それ以外の項目はχ²検定

IV 考 察

本研究では、約80%が乳幼児とのふれあい体験があると回答していた。倉繁ら¹²⁾は、大学、専門学校の女子学生の84%が、それまでに乳幼児とのふれあい体験があると回答していたと報告しており、ほぼ同様の結果であった。また、先行研究¹²⁾では、ふれあった子どもは「親戚の子」が57%と最も多いことが報告されており、本研究もおおむね類似した結果であった。具体的な体験内容については、「服を着替えさせた」「ミルクを飲ませた」等の世話をするという体験よりも、「おもちゃで遊んだ」「手を握った」等の遊びを通じた体験の割合が高かった。さらに、「ミルクを飲ませた」「お風呂に入れた」「おもつを交換した」等の世話をするという体験は、小学生の時期に割合が高かった。この理由として、小学生の時期に乳幼児の弟妹等の存在があることで、乳幼児の世話をする機会となっている可能性も考えられる。しかし、夫婦の完結出生児数は2人を下回り、減少傾向にあるとの報告²⁷⁾もあり、乳幼児の弟妹等がおらずに世話をする機会がない場合も多くなっていると考えられる。また、体験あり群の方が「弟妹」や「年下の親戚」がいると回答した割合が統計的に有意に高かったことから、家族や親戚の中での乳幼児の存在が、乳幼児とふれあう主要な機会となっていることが考えられる。

次に、親準備性として、「子ども・子育てに関する意識」平均得点は2.4点、「対子ども社会的自己効力感」平均得点は2.8点であり、先行研究では、それぞれ2.6点¹⁸⁾、3.3点²⁶⁾とやや低いものの、おおむね同様の得点であった。体験有無別の比較では、体験あり群は、「子ども・子育てに関する意識」「対子ども社会的自己効力感」の平均得点と、赤ちゃんとふれあう教室への参加希望の割合が統計的に有意に高く、乳幼児とのふれあい体験があった女子高校生の方が、親準備性が高い可能性が示唆された。

先行研究¹²⁾では、乳幼児とのふれあい体験のある大学生等の方が、子ども好きであることが

報告されている。また、高校生を対象とした先行研究では、「赤ちゃんふれあい体験学習」後に妊娠・出産・育児に対する肯定的認識が有意に高まることも報告⁸⁾されており、乳幼児とふれあう体験により、乳幼児への興味と関心が高まり、乳幼児の存在を肯定的にとらえて積極的にかかわるようになっていくことも考えられる。さらに、1歳6カ月児健康診査に來所した母親を対象とした研究では、虐待リスク項目としてのうつ傾向と低い親準備性が関連していたことが報告²⁸⁾されており、青少年期から親準備性を育成することは非常に重要と考える。加えて、体験学習等の実施者側の視点として、地域での学習プログラム実施者へのインタビュー調査の結果から、個人の親性準備性へのアプローチだけでなく、地域の子育て支援や児童虐待予防等の意識づけとしても意義があることが報告されている²⁹⁾。乳幼児の弟妹等の世話をする機会が減少傾向にあること²⁷⁾からも、地域や学校で青少年と乳幼児がふれあう機会を意図的に設定することは、地域で子育てを支える社会環境を醸成するだけでなく、青少年自身のその後の妊娠・出産・育児への支援にもつながると考える。

本研究の対象者は、都内の一女子高等学校に限定されていたことから、結果の一般化には限界がある。しかし、社会でどのように生きるのかという課題に対して真剣に模索する時期である青年中期³⁰⁾での親準備性と乳幼児とのふれあい体験の実態の一部を明らかにすることはできたと考える。今後、少子化の進行に伴い、青少年が乳幼児とふれあう機会はますます減少する可能性があることから、地域や学校で青少年が乳幼児とふれあう機会を意図的に増やし、地域で子育てを支える基盤づくりとすることや、青少年自身の将来の妊娠・出産・育児への支援につなげていくことが必要である。

謝辞

調査にご協力をいただきました都内の女子高等学校の生徒の皆様、教員の皆様に深謝いたします。

文 献

- 1) 内閣府. 令和2年版 少子化社会対策白書 第1章少子化をめぐる現状 2 出生数, 出生率の推移. (<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2020/r02pdfhonpen/pdf/sl-2.pdf>) 2020.9.30.
- 2) 内閣府. 少子化社会対策大綱～新しい令和の時代にふさわしい少子化対策へ. (https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/law/pdf/r020529/shoushika_taikou.pdf) 2020.9.30.
- 3) 考藤悦子, 片山美香, 高橋敏之, 他. 家庭科保育領域における触れ合い体験学習の意義と課題. 岡山大学教師教育開発センター紀要 2016; 6: 113-22.
- 4) 今井充子, 常盤洋子. 我国の行政による子育て支援の視点と課題に関する文献検討. The Kitakanto Medical Journal 2011; 61(3): 377-86.
- 5) 厚生労働省. 少子高齢社会等調査検討事業報告書. (https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu-Shakaihoshoutantou/002_1.pdf) 2020.6.30.
- 6) 佐々木綾子, 末原紀美代, 町浦美智子, 他. 青年期の親性を育てる「乳幼児とのふれあい育児体験」の男女差に関する研究: 心理・生理・内分泌学的指標による検討. 福井大学医学部研究雑誌 2008; 8(1-2): 17-29.
- 7) 佐藤洋美. 乳幼児とのふれあい体験学習が中学生の子育てに対するイメージに与える影響. 生活体験学習研究 2004; 4: 35-54.
- 8) 下中壽美, 井上松代, 玉城清子, 他. 「妊婦ふれあい体験学習」が高校生1年生女子のライフプラン, 妊娠・出産・育児の認識度に及ぼす影響. 思春期学 2009; 27(2): 194-203.
- 9) 石川敦子, 吉川はる奈. 中学校「技術・家庭科」の乳幼児ふれあい体験学習における効果と課題. 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 2012; 11: 153-60.
- 10) Sasso TK, Williams SK. The effectiveness of The Parenting Curriculum: An evaluation of high school students' questionnaire responses. Journal of Family and Consumer Sciences Education 2002; 20(2): 1-11.
- 11) 中野由美子. 生育体験の次世代育成力への影響: 性差と保育実習体験の効果. 目白大学総合科学研究 2008; 4: 119-28.
- 12) 倉繁迪, 猪野郁子. 育児に関する学生の意識調査: 子どもとのふれあい体験が及ぼす影響について. 小児保健研究 2001; 60(3): 447-53.
- 13) 鯨島雅子. 父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容(1): 「親性」尺度の作成と因子構造の検討. 日本看護研究学会雑誌 1999; 22(5): 23-35.
- 14) 大橋幸美, 浅野みどり. 親性とそれに類似した用語に関する国内文献の検討: 親性の概念明確化に向けて. 家族看護学研究 2009; 14(3): 57-65.
- 15) Spiteri G, Xuereb LB, Carrick-Sen D, et al. Preparation for parenthood: a concept analysis. Journal of Reproductive and Infant Psychology 2014; 32(2): 148-65.
- 16) 有馬志津子, 伊藤美樹子, 三上洋. 育児評価としての「親性」尺度開発の試み. 日本地域看護学会誌 2002; 4(1): 34-40.
- 17) 大橋幸美, 浅野みどり. 育児期の親性尺度の開発: 信頼性と妥当性の検討. 日本看護研究学会雑誌 2010; 33(5): 45-53.
- 18) 伊藤葉子. 中・高校生の親性準備性の発達. 日本家政学会誌 2003; 54(10): 801-12.
- 19) 佐々木綾子. 親準備性尺度の信頼性・妥当性の検討. 福井大学医学部研究雑誌 2007; 8(1-2): 41-50.
- 20) 岡本祐子, 古賀真紀子. 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関する要因の分析. 広島大学心理学研究 2004; 4: 159-72.
- 21) 川瀬隆千. 大学生の親準備性に関する研究. 宮崎公立大学人文学部紀要 2010; 17(1): 29-40.
- 22) 千原裕香, 西村真実子, 成田みぎわ, 他. 青年期前期における「親世代になることに対する意識尺度」の作成と信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌 2019; 39: 211-20.
- 23) 井上義朗, 深谷和子. 青年の親準備性をめぐって. 周産期医学 1983; 13(12): 2249-52.
- 24) 滝山佳子, 斎藤一枝. 中学生・高校生・大学生の親準備性の実状. 秋田大学教育学部研究紀要 1997; 52: 39-46.
- 25) 水口由紀子, 中新美保子, 井上信次. 青年期大学生の親準備性を育む要因の検討. 川崎医療福祉学会誌 2017; 27(1): 63-73.
- 26) 伊藤葉子. 子どもとの相互関係における中・高校生の社会的自己効力感の発達. 日本家政学会誌 2003; 54(4): 245-55.
- 27) 国立社会保障・人口問題研究所. 2015年社会保障・人口問題基本調査(結婚と出産に関する全国調査) 現代日本の結婚と出生: 第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書. (<http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15-reportALL.pdf>) 2020.6.30.
- 28) 小銭寿子. 妊娠期から3歳児健診まで精神的健康調査票を用いた健康状態の変化: 紋別市における養育環境・虐待リスクの把握と養育者支援. 厚生」の指標 2013; 60(15): 12-6.
- 29) 藤原美輪. 「中学生の親性準備性学習の検討」地域で育む関係性と児童虐待予防との関連要因. 最新社会福祉学研究 2019; 14: 21-34.
- 30) 文部科学省. 子ども徳育の充実に向けた在り方について(報告). (https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/at tach/1286128.htm) 2020.6.30.